

「土を考える会」を考える

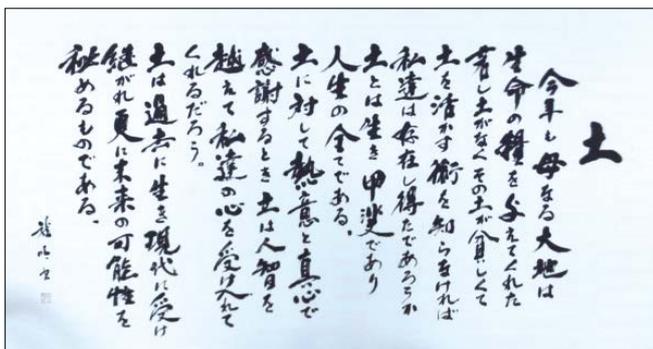
今年2月4日、スガノ農機(株)よりFAXが送信されてきた。後日に確認をしたところ、このFAXはすべての取引先および全国土を考える会(スガノ農機と弊社が事務局)の会員をはじめ農業・農機業界メディアに対しても送られていたことが分かった。その内容は、社長である菅野充八氏を同氏のパワハラ、セクハラ行為が同社のコンプライアンス上問題があるという理由から代表取締役を解任し、新たに大森聡氏が代表取締役に就任したというものであった。新社長は前専務取締役で社外から3年前に入った人である。

さらに全国土を考える会の役員に対して3月4日に土を考える会の緊急集会を行なうので来てほしい旨の連絡があり、前田喜芳会長をはじめ多数の役員が東京の会場に集まった。しかし、その集会に参加した役員によれば、菅野前社長の在任期間を示すものらしい「失われた12年」などというパネルとともに前社長の「悪行」をあげつらい新社長の自慢話に終始したという。それを聞いていた多数の会員たちから、その12年間に会員とスガノ農機社員とが実現してきた各地での乾田直播技術の普及をはじめとする日本農業への畑作技術体系の広がりがまったくなかったかのよう語られることに対しても強い反発があり、多くの役員たちは途中で席を立った。

それ以後、役員たちは連絡を取り合い、土を考える会の理念や成り立ち、そしてスガノ農機自身の「白の理念」も見失った同社への失望が語り合われた。そして、まず北海道土を考える会が3月28日に北海道北広島市で臨時総会を開催し、今後、北海道土を考える会はスガノ農機を事務局とは認めず、独自の活動することを決議した。さらにそれを受けて4月12日に東京都内で臨時役員会を開催し、全国組織もその方向で進めるべく各地での意見をまとめることにした。

前号では「土を考える会」の理念を検証・再確認している。引き続き今号では土を考える会の役員たちによる座談会を掲載する。

昆吉則(株)農業技術通信社代表取締役・全国土を考える会事務局)



転機の「土を考える会」、 原点を継ぎ新たな一歩へ

「土を考える会」は、「全国土を考える会」および6つの地区の「土を考える会」の組織があり、各地区に会員が所属している。3月4日、主幹事務局のスガノ農機が「土を考える会」の各地区の幹部役員を招集したが、その会議は会の規約に基づく形式や本来の理念が踏襲されていないものだった。それを目にした会員たちは、果たして現体制のまま、設立当初の理念を全うしていけるのかという不安を覚えることとなる。

各会に先駆け臨時総会を開いた「北海道土を考える会」は一時、スガノ農機の「土を考える会」事務局の機能を返還してもらうことを求める決議をした。いずれまた同志として「集う」日が来ることを願いつつ、「土を考える会」は、これを機に自らも原点に立ち返るとともに、将来あるべき姿に向かって新たな一歩を踏み出そうとしている。この座談会は4月12日の全国の臨時役員会終了後に行なわれた。

同志が集う 「土を考える会」

昆吉則 これまでの経緯に補足しますと、3月28日に開催された「北海道土を考える会」の議決を受けて、各地区で臨時役員会が開かれ、本日は「全国土を考える会」臨時役員会が開かれました。本日の議決をもとに、今後、各地区でも話し合いの場が持たれることと思います。双方の議決に至った理由にもなると思いますが、あらためて「土を考える会」の理念や今後の目指すところについて、皆さまのご意見を伺いたいと思います。はじめに「全国土を考える会」会長の前田さん、ご挨拶をお願いします。

前田喜芳 九州から北海道まで、遠

いとところからお集まりいただきありがとうございます。役員の方たちにとつては、今回の出来事は予想もしなかったことです。たいへんな出来事であり、事件と言いまじょうか。私のささやかな経験から言いますと、事件は人材を発掘する、あるいは、事件は人を育てると言ってもいいかもしれません。それが私の人生のなかでの結論です。

これから「土を考える会」をどういうふうにしていくのか、皆さんと基本的なことを話したいと思っております。どうぞ最後までよろしくお願ひします。

長門茂明 「北海道土を考える会」役員の前田です。本日は田村会長の

「北海道土を考える会」議決 (3月28日)

■1号議案

事務局変更について
スガノ農機は、諸般の事情により当分の間、事務局を外し、農業機械メーカーの一員として耕す文化の見地から参画し活躍していただきま

■2号議案

今後の活動方針について
特定のメーカーに依存した会ではなく、発足当初の原点に帰り、農業関連全般(作業機、トラクター、肥料、農業、農政、試験場、流通、加工業、市場等々)の多元的情報を学ばせていただき、農業経営者として自立の精神を基とし、すがる農業経営者から貢献する農業経営者を目指す会としたい。

■3その他

全国規模の情報交換・農業経営者同士の交流等、個々では到底困難な数々の成果をあげている。このような観点からも従来どおり全国組織を維持するよう府県各支部は理解、協議していただきたい。全会一致で可決した。

代理で出席させていただいております。

前田 「北海道土を考える会」の臨時総会の報告を受けて、各地区でそれぞれ動きがありました。それでは皆さん、桜のように九州から北海道



前田 喜芳
まえだ・きよし

全国土を考える会会長、北陸東海近畿地区会長。1947年生まれ。富山県黒部市在住。農事組合法人 荒俣(あらまた)営農組合前組合長。経営概要：水稲・大麦・大豆。経営面積 38ha。土を考える会には2009年、第19回有機物循環農法体験記に応募した後に参加。ブラウ耕を導入したことがきっかけ。「現在、試験的に使用したブラウ耕大豆の排水対策に効果的であることを実感している」



長門 茂明
ながと・しげあき

北海道土を考える会副会長。1967年生まれ。北海道厚真町在住。農業生産法人(有)内海アグリファーム専務取締役。経営概要：畑作・水稲・野菜。経営面積約90ha。1989年から約6年間、スガノ農機本社工場に勤め、レーザーレベラー開発に携わる。その間、事務局側応援人員として土を考える会に参加。スガノ農機退職後就農、土を考える会中央支部の理事。玉手会長の後、現在まで支部会長、北海道土を考える会副会長を務める。「土を考える会は、親父が教えてくれない所を、教えてくれる大事な場所であると思う」



手島 健次郎
てしま・けんじろう

九州沖縄土を考える会会長。1958年生まれ。佐賀県鳥栖市在住。経営概要：個人経営。年間約48.5ha。内訳は水稲(飼料用米含む)22ha、麦類(大麦、小麦)15ha、大豆2ha、タマネギ1.5ha、ジャガイモ7ha、その他の葉物野菜1ha。土を考える会との出会いは、2004年8月に北海道に出向き、大型乾燥機が稼働しはじめたばかりの勝部農場を訪れたところから始まる。以来、地域を越えて全国各地の仲間との交流が続いている。時代を先読みする仲間からの情報は、普通の農家でありたくないというモットーに通じており、自らの農業経営に活かしてきた。「どのような会かと尋ねられれば、『変わり者の専業農家の集まり』と紹介している」



結城 良裕
ゆうき・よしひろ

九州沖縄土を考える会監査役。1978年生まれ。福岡県那珂川町在住。経営概要：主食用米4.5ha、稲WCS 2.5ha、麦WCS 12ha、子実トウモロコシ3.6haを生産。稲刈りの受託作業12ha、乾燥・調製作業を18ha引き受けている。その他、近所の酪農家たちと別法人でコントラクター組織をつくり、麦WCS 20ha、稲WCS 54haを受託。自作地はわずか22aで、10a程度の未整備田が多い条件下での水田農業の戦略を模索している。2010年に有機物循環農法体験記の授賞式に参加して以来、会員との交流を次第に深め、全国の会合に積極的に足を運ぶ。「さまざまな経営体系を見て自らの経営に合う部分を吟味することに意義を感じている」

へ、順にお話しください。手島健次郎 「九州沖縄土を考える会」会長の手島です。4月4日に宮崎県小林市で臨時役員会を開き、前会長および全役員の7名が参加しました。九州沖縄は「全国土を考える会」と足並みをそろえようという話をさせていただきました。この臨時役員会を踏まえて次の九州沖縄の臨時総会を開きたいと考えています。結城良裕 同じく「九州沖縄土を考える会」監査役の結城です。手島

会長と二人三脚で頑張りますので、よろしく願います。数内孝博 「中国四国土を考える会」会長の数内です。4月8日に鳥取県で元会長にも参加いただき全4人で臨時役員会を開催しました。すでに動き始めている企画もあるので、これから事務的なことをどうしようかという話し合いをしました。(スガノスタッフの協力がなければ岡山市の会員である奥山孝明氏の圃場

に会員が集まり、大蔵利明氏(農研機構)を招いて土層の断面を取るモノリスの作成を通して圃場作りを学ぶエリア研修会を開催した)黒川義治 「関東甲信越土を考える会」会長の黒川です。私は入会して3、4年なので、十分に趣旨がわかっていないのですが、このたび会長を務めることになりました。4月14日に、臨時役員会を開催する予定です。今井正人 「関東甲信越土を考える会」役員の今井です。「全国土を考

える会」役員の飯田さんの代理で参りました。14日は、これまで会に携わってくれた先輩方にも意見を聞きたいと思っています。永浦清太郎 「東北土を考える会」会長の永浦です。4月3日に仙台市で11名中9名が参加し2名が会長一任で、臨時役員会を開きました。今後の方向性が明確になるまで、事業計画はいったん凍結しています。急いで今後のことを決めようとして、会員がバラバラになるのは避けたい

と思っています。

前田 皆さん、ありがとうございます。私からは「北陸東海近畿土を考える会」の報告をいたします。4月6日に四日市で臨時役員会を開きました。役員6名中5名参加しました。私たちは、北海道の意向に沿うことになりました。

長門 北海道が決議を各地区に投げかけたのは、「土を考える会」を大きく方向転換させるとしても、全国の会員のチームワークを守りたいと思っていたからです。

自助独立の会としての原点へ

昆 「土を考える会」の原点は、スガノ農機の三代目社長でいらした菅野祥孝さんの「設立の意図」にあると思います。

長門 北海道の会員による開催報告と議決のほかに、菅野祥孝さんが書かれた『北海道土を考える会』設立の意図を記すと、『北海道土を考える会設立の意図』を読み返す（いずれも前号特集参照）も皆さんのお手元にあると思います。

昆 それを振り返りながら、「北海道土を考える会」の長門さんが、設立当時から歩みをまとめてきてくださいました。ぜひ、ご紹介いただけるでしょうか（下段右側囲み記

「北海道土を考える会」の歩み

昭和53年、わずか20名の農業者が北海道全域から上富良野町に集結。道内各地域で特色ある経営をする豪農が集まった。

「あなたにとって、土とはなんですか」の問いかけに、ある者はお母ちゃんみたいなものと言い、ある者はかけがえない命の源と言い、ある者は人生のすべてを懸けても惜しくないとも言う。雨風、災害、泥流、酸性土壌、粘質土壌。決して条件の良くない圃場にたった一人で戦いを挑む侍たちは、哲学という武装をしていたに違いない。

同席されたスガノ農機は、その農業者の迫力に圧倒されるも熱い感動を覚え、再会を誓う彼らと、事務局として参加させていただきながら、お互いの自己研鑽の場所として活動させていただこうと心に決める。

以後、北海道では、40回大会を迎えるまで歴史を重ね、東北、関東甲信越、北陸東海近畿、中国四国、九州沖縄、各土を考える会を組織するまでになり、全国土を考える会として、500名に届かんとする国内唯一、自主独立した農業経営者の集団となるわけである。日本農業の時代に即した、先頭を切って対応する同士から皆が学び、我々は常に一歩先を行く農業集団の団体になり得た。

同志的企業として主幹事務局を務めてこられたスガノ農機株式会社も、耕すをもって農業参画極めるにありという言葉のごとく、ツイストコーラター、田畑輪換プラウ、アクスルプラウ、プラソイラ、レーザーレベラーなど、多くの現場の求める製品開発で、我々の農業経営を後押ししてくださった。さらにはそれを巧みに組み合わせ、工法をも開発し、水稻栽培の常識を打破る乾田直播の普及にも貢献されることとなる。

事)。名文ですね。

長門 事務局としてスガノ農機さんが参画してくださったことで、「耕す文化」が我々に定着して、経営が良くなって、会員が増えて、中身の濃い研修ができたというのは紛れもない事実です。

しかしいま「土を考える会」の基本的理念が継続できるかどうかというところにいます。そこをしつかり押さえて、会を維持するために何をすべきかを考えたいと思いましたが、ではどうするかということに行き着くのですが、もともと「土を

考える会」は独立独歩の組織でした。

昆 もともと北海道の農業経営者たちが自腹で集まって学ぼうとしましたね。

祥孝さんの考え方の延長線上にある「土を考える会」にしても「有機物循環農法」にしても、会費によって成り立っていて、自立性を持っていますからね。

長門 そうです。近所の諸先輩はみんな口を揃えて、昔に戻せばいいじゃないのと言ってくれました。研修会やエリア会なども会費で賄えるようにすればいい。シンプルにしまし

ようと。

長門 スガノ農機が事務局をするということは、単に会費をたくさん納めるだけではなくて、労力的な部分の投資もものすごく大きかったと思います。

前田 各地区のスガノ農機のエリアマネージャーは、たいへんだと思いますよ。私の地区は、北陸、東海、近畿だから、気候も違いますよね。どういうテーマで研修会をやるか、合わせどころを考えるのは、なかなかたいへんだと思うんですよ。

結城 九州も広いので同じです。



藪内 孝博
やぶうち・たかひろ

中国四国土を考える会会長。1968年生まれ。鳥取県岩美町在住。藪内農場代表。経営概要：水稲25ha（山田錦10ha、五百万石3ha、コシヒカリ6ha、日本晴3ha、ひとめぼれ、ハクトモチ）、大豆3ha。作業受託延べ50ha。2008年の第18回ボトムブラウ体験記でホワイト賞を受賞し入会。2014年から監査、2016年から会長を務める。



黒川 義治
くろかわ・よしはる

関東甲信越土を考える会会長。1968年生まれ。新潟県上越市在住。榊花の米代表取締役社長。経営概要：水稲35ha。減農薬栽培や「への字農法」を採用し、自社ブランド「花の米こしひかり」として全量を直売している。2013年よりカニ殻肥料を使った「越後に米こしひかり」を地域の特産品として販売開始。冬場に餅などの加工品を手がける。土を考える会の集まりには数年前より参加していたが、正式に会員になったのは3~4年前。「関東甲信越の農業関係者と出会える貴重な場で、なかでも土づくりを愛する仲間たちとの交流には面白みを感じている。さらにSNSで交流の輪が広がり、滋賀や北海道にも仲間が増えた」



今井 正人
いまい・まさひと

関東甲信越土を考える会幹事。1977年生まれ。千葉県我孫子市在住。(有)今井興業ライスセンター。2009年より全国土を考える会の会員になる。2005年ごろにライスセンターに納品されていたレーザーレベラー 4mを見て衝撃を受ける。その後、ブラウ→パーチカルハロー→サイドカッター→スタブルカルチとスガノ農機の機械を導入。2009年に第19回ボトムブラウ 有機物循環農法体験記を書く。「菅野祥孝社長の土に対する熱い思いや、スガノ農機が農家と一緒に真剣に考え、たくさんのアドバイスをくれたことを思い出す」



永浦 清太郎
ながうら・せいたろう

東北土を考える会会長。1982年生まれ。宮城県登米市在住。(有)とねやしき農場代表取締役。経営概要：水稲・大豆・施設野菜（ほうれん草、小松菜、蕪）、作業受託。東北土を考える会へは2002年に参加。「当時、農業が嫌いで継ぐ気もなく家を出ていたが、父に一日だけ付き合えと言われ、訳もわからないまま参加した。そこに集まっていたのは、私の知っているお先真つ暗農業者たちとは180度違う、先を見据え今を楽しむ人たちだった。農業に対するイメージが変わった一日だった。後に入社し農業を始めるきっかけの一つだった。現在会長職になり3年目になるが、私が15年前に抱いた思いを多くの若い世代に感じてもらえる会にしていきたいと思いながら活動している」

永浦 東北の場合は、秋田に事務所があるのですが、名簿やお金、資料の管理だけではなくて、ジャンパーやタオルとかけっこのような量の荷物があります。

藪内 中国四国も本当に活動はスガノ農機におんぶにだっこです。

昆 これまでの尽力に感謝しつつ、今後、スガノ農機とはどういうパートナーシップを持ち続けられるでしょうか。

長門 お互い独立独歩で交わるとこ

ろがないということは避けるべきだと思います。スガノ農機さんには機械メーカーを牽引する立場として活躍していただき、「土を考える会」においては、企業会員の一人として耕す文化をきちっと継承したり全国に拡散したりする役割を続けていただければと思います。

昆 本誌を創刊したのも祥孝さんに背中を押されたからです。「土を考える会」には、祥孝さんの日本の水田農業を含めて、畑作体系を定着さ

せたいという思いもありました。日本の水田農業にはイノベーションが必要で、本誌もそれをテーマにしていきたいです。

永浦 決議の意味は、事務局から解放して、会員は辞めないでほしいということですよ。

藪内 いずれ同志として戻ってきてほしいと。

長門 新しい農業の開発をしなから、実践部隊として我々とともに歩んでほしいと思います。

「失われた12年」への違和感

昆 順序が逆かもしれませんが、スガノ農機から送られてきた菅野充八前社長解任を伝えるFAXに始まる今回の経緯に関して皆さんそれをどう受け止められたのですか。

永浦 最初にFAXを見たとき、直観的に乗っ取りだと思いました。オーナーカンパニーでこんなことが起こるのかとビックリしました。

長門 あのFAX自体が異常ですよ。一般的な社長交代ではあのような表現は会社にとってマイナスなはず。そのことに強い不信感を覚えました。

前田 最初にFAXを見たとき、充八さんにそんなパワハラ、セクハラが本当にあったのだろうかと思いましたが。しかし、あのFAXは充八さんを徹底的に叩いて再起不能にしようとしているのではないかなと感じました。

昆 各地の営業マンたちから社長にほろくそに言われるとか意見を聞いてくれないなんていうボヤキを聞いたことはありますが、それがパワハラに当たるのかどうかはわかりません。また、研修の会議とレポート提出で営業に取り組めないといった話も聞きました。ましてやセクハラについてはネットでいろんな情報を流しています。2ちゃんねるみたいなもの。我が社のスタッフにまで電話をしてきて、そういう事実はないかと聞いてきたそうだから、今度のスガノとしてはなんとか充八スキャンダルを探し出そうとしているのではとも感じました。藪の中ですね。3月4日の東京での集会についてはどうですか。

永浦 案内をもらったときから「土を考える会」との関わりについて勘

違いしているのだからと思うってました。どこかのタイミングで「何か勘違いされていませんか？」とおうと思つて会場に行きました。そして始まったのが前社長の悪口と自分のこれからのヒーローストーリーでした。社員でもない株主でもない我々に、今回の乗っ取りの正当性を主張し、外部の人間にも自分を認めてもらいたくて必死だな、と冷めた感情で聞いていました。

ただ、身内の恥、会社のゴタゴタをプレゼン形式で発表する経営者を初めて見たので、すこし面白くもありました。そして会員たちが騒ぎだし、一部の人が席を立つて行つてしまつても、何を感じるでもなく平然と笑顔なのを見て、後でちゃんと話せばわかると思つていたことが無理だと痛感しました。

長門 そこに「失われた12年」というプレゼンパネルがあり、それを見た段階で、これは「土を考える会」の集まりではないなと思ひました。農業技術通信社を外した事務局の方だけで行なうことも理解できなかつたが、案内文も会長名ではないし、スガノ農機の披露宴としか思えなかつた。どんな理由であれ解任した前社長の悪口は、聞いていて不愉快。自分は他人の悪口が大嫌いなので：。片方の言い分しか聞けない状況

での披露宴は、理解しようがないと感じましたし、「失われた12年」という表現も、耳触りが悪い。

我々の12年は、全国会員相互の交流が活発になった12年であつて、充八した12年ですし、もしそれを感じ取れないスガノ農機さんであれば、よく見ていない、理解していません。いうことにしかりません。

今井 失われた12年？ 何も知らないのに言つちゃダメでしょ！ 僕にとっては沢山のものを得た12年であつたのは間違いないし、この12年のおかげで農業や土に対する今の自分がある。

結城 「失われた12年」とプレゼンが始まつたときは、ただ？？と思ひました。この間、スガノと出会つていろんな技術や施工方法を学べたし、「土を考える会」を通して全国のとんでもなく凄く変態農家たちに出会えたのです。頓珍漢なこと言つてるな！と思つて聞いていました。

挑戦的経営者とメーカーとの関係

昆 新経営陣は、「土を考える会」の活動を通してスガノが会員に新しい機械や技術を教えてきたと勘違いしているのではないのでしょうか。確かに、スガノはプラウをはじめとした畑作技術体系を日本に定着させる

ために大変な苦勞をしてくたし、それは日本農業の未来を作るものだと僕は思つています。日本の土に合うプラウを開発し、サブソイラーやプラソイラー、それにレーザレベラーなどを開発してこそ今の乾田直播もできるようになった。村井（信仁）さんや大谷（隆二）さん、そして齊藤（義崇）さんなどの研究者を巻き込んでくれたのもスガノです。

でも、それだけで技術が普及定着していくわけではありません。各地の会員たちが自らリスクをとるなかでスガノ製品だけでは解決しない課題を独自に機械導入して試し、会員やスガノに教え合つてきた。その出合いの場が「土を考える会」であつたわけで、それは祥孝さんが最初の「北海道土を考える会」で出会つた篤農家たちと語り、ともに学んだことと同じなのです。

「土を考える会」はスガノなしには成立しなかつたけど、そこに集う挑戦的な農業経営者がいてこそ続き発展してきたのです。だから、何か勘違ひしているんじゃないのという皆さんの言葉が出てくるわけですよ。そんな会への思い、ここでは一番「土を考える会」との付き合いが長い長門さん、何かありませんか。

長門 この会に関わるようになってから、25年以上になります。最初は



おつかないほどの迫力のある農家の集まりに圧倒されたところもありますが、農業だけでなく生きるうえで親に教われないことを随分教えてもらった気がします。

ユーザーとメーカーの関係も当然存在するのですが、どちらも農業を良くしたいという気持ちで通じていた。これからもその気持ちに変わりはなく、我々は農業の現場の視点で泥臭く土と向き合っていくだけです。世代を超え地域を越えて農業に激論を交わすことのできる他に類を見ない集まりだと思います。みんな自分たちのことを「変人」と胸を張って言えるのも、ここだけです。今井 私にとっては沢山の「農家屋」と知り合うきっかけをつくってくれ

た。そして今の自分に農業とは、土とは何なのか？という正解のない課題をくれた大切な会です。

より幅広い情報を交換する集いへ

昆 今後、「土を考える会」はどのような方向に進みたいと皆さんお考えですか。

長門 今回のことは、我々にとってもいいきっかけをつくってもらったと思っています。いま我々が抱える課題は、土を耕すことだけで解決するのは、そろそろ難しい時期にさしかかっていて、新しい「土を考える会」を産み落とすような時期にあると考えています。耕す文化を継承しながら、いまは販売すること、いまは加工することといったように、いろいろな課題を湧き出させて持ち寄ることができると思います。そうすると研究テーマに広がりが出てきます。

我々自身が多元的なところから情報を集めて、デイストリビューターのような存在になるといいのかなとイメージしています。ここに先輩と話をしながら書いたメモがあるので読ませていただきます。

「農業界全般、作業機、トラクター、肥料、農薬、農政、試験場、流通、加工、販売、あるいは消費者の中心に位置し、必要な情報を幅広く、適

期に研究、提供できる会にしたい」

とても大きなイメージですが、そのイメージを持ったうえで、いままで培ってきた「土を考える会」をどう進めていきたいかというところを皆さんに投げかけたかなと思っています。

昆 いまの長門さんの定義、どうでしょう。

前田 何年前でしたか、スガノ農機さんの働きかけで、各大手機械メーカーや設計士さんが参加してくださいったことがあります。祥孝さんの理念を引き継ぐなら、他のメーカーあるいは他の産業界とも付き合っていくということも考えられると思います。すでに加工や販売の研修会をしている地区もあります。

昆 そういうことは、「土を考える会」のメンバーの力量次第でできると思います。そもそもの「土を考える会」の理念は重要で、それは受け継ぎたい。時代が進んでくるなかで、土の課題を超え、マーケットのことを含めて関わるメンバーを増やしていくということですね。いずれも基本は経営ですよ。

長門 だからこそ、「土を考える会」は、情報の集まる場所にしたいかないと、企画が膨らんでこないのではないかと思います。北海道では、たとえば十勝支部が気象庁から気象

予報士を呼んだり、ホクレンから肥料担当を呼んだりしています。

結城 九州でも、研修会がパターン化しているので、ほかのネタがほしいところですね。

長門 ほかの地区がやっていることを見に行こうということをやってもいいですね。

昆 いまから40年前に設立した当初は、北海道の農家の少数精鋭が集まっていたわけですよ。ある人には関係ない話だとしても、少し高いレベルのことを取り上げてどんどん高みに向かわないと、陳腐化していくし、新しい体制をつくっていくことができないと思います。

長門 正直、私も20数年間、この会に関わっていますが、初めはまったくついていけませんでしたが。北海道のそうそうたるメンバーの話を遠くに座って聞き耳を立てていました。怖いけど面白かったですね。

昆 最後に前田会長、締めていただきます。

前田 冒頭でも話しましたが、なかなか難しいテーマです。今日の話し合いに若い人たちが来てくれて、非常に心強いと思っています。いずれは、皆さんの時代です。若い人たちのためにも、いいものをつくってほしいと思います。ありがとうございます。